

厚生労働科学研究費補助金
政策科学総合研究事業

高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り
基準に関する研究

—平成 22 年度調査(3年目)報告—

平成 22 年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 津村 智恵子

平成 23 (2011) 年 3 月

目 次 2

I. 総括研究報告

高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究(継続3年目の調査報告)	主任研究者 津村智恵子	
A.研究目的、B.方法、倫理的配慮		3
C.結果、D. 考察		4
E.まとめ		6
(別添資料)1. 見守りチェックシート(案)		8
2. シナリオ『友蔵さん』(修正版)		9-11

II. 分担研究報告

1. 泉南市の高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究(大阪府泉南市継続3年目の調査報告)	分担研究者 河野あゆみ	12
2. 羽曳野市の高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究(大阪府羽曳野市継続3年目の調査報告)	分担研究者 和泉京子	14
3. 堺市西区の高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究(大阪府堺市西区継続3年間の調査報告)	分担研究者 臼井キミカ	15
4. 堺市南区の高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究(大阪府堺市南区継続3年目の調査報告)	分担研究者川井太加子,山本美輪	17
5. 神戸市東灘区の高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究(神戸市東灘区継続3年目の調査報告)	分担研究者 榎田聖子	18
6. 神戸市須磨区の高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究(神戸市須磨区継続3年目の調査報告)	分担研究者大井美紀,鍛冶葉子	21
7. 福井県勝山市限界地域の高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究(福井県勝山市継続3年目の調査報告)	分担研究者金谷志子	24
8. 高知県芸西村の高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究(高知県芸西村継続3年目の調査報告)	分担研究者大井美紀,鍛冶葉子	27
9. 高知県大豊町の高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究(高知県大豊町継続3年目の調査報告)	分担研究者 上村聡子	29
10. 高齢者見守り組織の先進的取組み地域視察報告	分担研究者 前原なおみ	30
III. 研究成果の刊行に関する一覧表		31
IV. 研究成果の刊行物・別刷		32-41

高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究

研究代表者 津村智恵子 甲南女子大学看護リハビリテーション学部 学部長

研究要旨:3年間継続参加の見守り組織所在の地域別及び、見守り専従者の有・無別等で9市区町の28見守り組織に本年修正を加えた見守りチェックシート(案)を配布・試行。その3カ月前後、見守り組織メンバーにアンケートとインタビューを実施。データ分析より、ボランティア用の見守りチェックシート(案)は見守り必要者の早期把握と住民の見守り範囲・基準の明確化に役立っていた。また、調査結果は昨年同様、見守り専従者配置ありは見守り組織メンバーの不安と責任軽減に繋がっていた。さらに都市、農村共に家族の絆は希薄になってきており、過疎・限界集落等の見守り組織メンバーの高齢化はITC導入せざるを得ない状況にあり、都市でもセルフ・ネグレクト状態の訪問拒否事例等ではITC導入は必要であった。加えて9市区町で実施した見守り組織育成研修プログラムは、有効であることが判明した。また、見守りモデル組織視察は見守り地区組織の主体性を啓発する教育手法への示唆を得た。

研究分担者

河野あゆみ（大阪市立大学医学部看護学研究科 教授）
和泉 京子（大阪府立大学看護学部看護学研究科 准教授）
臼井キミカ（大阪市立大学医学部看護学研究科 教授）
大井 美紀（甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科 准教授）
榊田 聖子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科 助教）
鍛冶 葉子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科 助教）
上村 聡子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科 助教）
前原なおみ（甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科 助教）
金谷 志子（大阪市立大学医学部看護学科 講師）
川井太加子（桃山学院大学社会福祉学部社会福祉学科 准教授）
山本 美輪（大阪信愛女学院短期大学 准教授）

A. 研究目的

- 1) 住民ボランティア用の見守り基準(案)の作成と調査対象地区での試行と修正。
- 2) 調査対象地区内の見守り組織構成員等に研修を実施し、見守り専従職員の有無別での見守り組織活動内容・方法の変化を調査。
- 3) 見守りボランティアに対し研修を行い、見守り組織研修プログラム(案)試行の成果をみる。
- 4) 全国の先進的見守り組織を視察(1カ所)して、見守り組織のあり方への参考にする。

B. 研究方法(継続3年目)

- 1) 住民ボランティア用の見守り基準(案)の作成と試行、回収と量的分析

前年度から引き続き協力を得ている各地区の見守り組織メンバーに見守りの必要性についての研修と併せ、本年度当初に修正した見守りチェックシート(案)(別添資料1:「総括報告書」p8)の使い方を説明し、その後配布。この研修及び説明会の後、3カ月経過後に使用を確認し、回収した見守りチェックシート(案)は9市区町で試行103部、アンケート152部を回収。

分析は、見守りチェックシートの項目を地域別及び見守り専門職の有無別で比較・検討を行い、チェックシート内容については統計ソフトSPSS Ver.15を用い集計、適宜各種検定等を用い分析を行った。

2) 住民見守り組織活動の実際と質的分析

前年度から引き続き協力を得ている各地区の見守り組織メンバー及び、関係する保健医療福祉職従事者を対象に、ほぼ同一内容の研修を平成21年6月～平成21年12月の期間に実施。この研修の参加者の内、前年度から引き続き協力を得ている6市町村8組織の見守り組織メンバー272人について、グループ又は個別インタビューを実施。同意の得られた対象者について逐語録を作成。同意が得られていたが録音した音声聞き取りにくい場合等については、書記メモ・議事録をもとに発言内容をまとめた。逐語録データは、テキストマイニングツールであるText Mining Studio3.1(数理システム)により分析を行なった。

3) 見守り組織研修プログラム(案)作成

研修は、昨年に引き続き第1回目は「高齢者虐待はなぜ起きたの、近隣見守り組織は今なぜ必要なのか、見守りチェックシートはなぜ必要か等」、次に示すプログラム及び見守りチェックシート(案)の使い方等の説明を含め実施。

・研修時間:2時間程度をめやすに見守り組織メンバーの集まる昼又は夜間に実施。

・研修プログラム

- (1)ミニレクチャー10分「セルフ・ネグレクトとは」
専門家(主任・分担研究者等)の話。
- (2)シナリオ『友蔵さん(p9-11)』約15分を地域
ボランティアで寸劇を行い、参加者はドラマテ
ィックリリース体験をする。
(他にDVD鑑賞:15分『パラサイト殺人—息子
による 経済虐待事件—NHK クローズアップ現代』
鑑賞を一部地域では実施)
(DVDは主任研究者出演、NHK担当者使用了解取付)
- (3)グループワーク:次の2点を話合う。又話合っ
た内容を発表、参加者相互の意見交換行う。
Q1. 寸劇事例の友蔵さんで気になったことは?
Q2. あなたが友蔵さんなら?隣人なら?息子夫
婦なら?囲碁仲間なら?民生委員や見守りボ
ランティアであったら?どう対応するのか。
(研修内容と方法の詳細については「総括報告
書」p35、表1、表2を参照)

・研修プログラムの分析

前年度から引き続き協力を得ている9市区町の見守り組織メンバー152人について、前述(3)のグループ又は個別インタビュー実施の際、併せて今回の研修プログラムへの意見等を聞き、収集した逐語録データは、テキストマイニングツールであるText Mining Studio3.1(数理システム)により分析を行なった。

4) 先進的見守り組織の視察

インターネットで全国市町村のうち、高齢者見守り組織活動が活発に行われている市町を検索、本年度は福岡県大牟田市の認知症高齢者早期発見・対処等へのまちぐるみ活動を3回にわたり訪問・視察を行い、その成果を分析掲載。また、本研究の代表者・分担者等が主催する大阪高齢者虐待研究会の研修として「大牟田市の認知症高齢者早期発見・対処等へのまちぐるみ活動」を紹介、研修参加者の反響は大であった。

(倫理面への配慮)

作成した3年間の研究計画書は平成20年5月に甲南女子大学倫理審査委員会に提出し、承認を得ている。対象者の個人情報漏れがないよう調査対象市町の個人情報保護条例を遵守、現地関係専門職及び所属長等の了解を取り、対象の見守り組織代表者、インタビュー対象者等にも同様の配慮・手続きをした上で本年は見守りチェックシート(案)を試行し、その後、インタビュー調査を実施。

両調査とも、調査票や逐語録データは作業終了までは鍵戸棚に保管している。インタビューデータは個人が特定できないよう実施後速やかに音声言語を文字・記号化し処理した。その後、分析作業終了まで鍵戸棚に厳重に保管し、両調査のデータはともに各年度の研究終了後、直ちに裁断粉碎している。

C・D. 結果と考察

1. ボランティア用見守りチェックシート(案)の修正と実施

平成21年度に見守りチェックシート(案)を実施した市区町での見守り組織へのアンケート調査とグループインタビューをもとに研究代表者、分担研究者等が4月～5月に検討を重ね修正した見守りチェックシート(案)(別添資料1「総括報告書」p8)を継続調査地区の見守り組織メンバーに対し使用説明後、配布・試行を依頼。

見守りチェックシート(案)は9市区町で試行、103部を回収、アンケートは152部を回収。

1). 見守りチェックシートの項目の選定

項目については、平成22年度は、項目を整理し、全ての項目をチェックするよう変更。基本編「生活の様子」で全てを把握することは難しい。研修内容と使用説明に時間を掛けたことで22年度の見守りチェックリストは、使いやすさ、内容の適切さ、判断基準としては前年度より改善された。

2) 地域特性別でみる必要項目

農村部では、他の地域に比べて、見守りチェックリストの使いやすさ、内容の適切さ、判断基準として有効と考える人の割合が高かった。このことから、農村部では、見守りボランティアの高齢化により、広範囲にわたる見守り活動の限界に対して、見落としなく、ポイントをおさえることができるツールとして有用であったと考えられる。都市部・都市近郊では、外や玄関先から観察可能な項目(認知症を疑うサイン、会話等コミュニケーションに関する項目、人との交流)については、把握されていたが、信頼関係を築かないと観察できない項目(食事や家事、経済状態、移動手段、緊急連絡先等)については、把握することは困難であることがわかった。また、認知症については、研修等を通じて、教育を受けている見守り組織メンバーが増えており、認知症に関する観察項目は、把握しやすいとの意見が出されている。

3) 見守り専従の有無別でみる必要項目

見守り専従なしの地域では、見守り専従ありの地域に比べて「見守りチェックリストが使いやすい」、「内容が適切である」、「自分たちが見守るべき判断基準として役にたった」と答えた人は、有意に多かった。見守り専従ありの地域では、日ごろから、見守り専従との交流をとおして見守り判断基準について学ぶ機会を持っている。しかし、見守り専従なしの地域では、見守り判断基準を学ぶ機会が少ないため、見守りチェックリストは、役に立ったと考える。

見守り専従ありの地域では、住民見守り組織メンバーと見守り専従の役割が明確であるため、住民見守り組織メンバーの役割に合わせた見守りチェックリスト内容に取捨選択する必要がある。

具体的には、外から日常の見守り活動で把握できる認知機能や生活障害、コミュニケーション、人との交流に関する項目は必須不可欠である。

4) 対象、見守りボランティアの変化に対応する 用い方や必要項目の作成

また、新規転入者や家族形態の変化、日頃の見守り上変化に気づいた場合は、詳細についても把握できる項目を新たに作成して用いる。日常観察と急変用に詳細を把握するための見守りチェックリストの2段階の使用方法を検討することは、見守り組織メンバーの交代や経験年数に対応するために必要と考える。

2.住民の見守り組織の活動と変化

1)見守り対象者の状況

地域の別なく、見守り対象者は後期高齢者が5割を超え、一人暮らし高齢者世帯は全ての調査地域で最も多く、過半数から過疎・限界集落では8割を超えていた。また、身体不自由、難聴、視力低下などで日常生活、コミュニケーション困難な高齢者は2～3割を占めていた。

都市部では、一人暮らしが多く、都市近郊では、身体の不自由を抱えているため、移動に杖や車椅子が必要で、事故や転倒の危険のある対象者が多かった。また、認知機能が低下している、うつ状態と考えられる対象者がみられた。人との交流では、「正月3日は誰とも過ごしていない、一人だった」見守り対象者数が増加傾向にあった。緊急連絡先については、都市部と都市近郊で不明が多かった。緊急連絡先が「子ども」の割合が高いが、平成21年度に比べ22年度は無回答の割合が高くなった。これらのことから、親族間でも人間関係の希薄化が進んでいる可能性がある。そのため、交流会等事業参加によって、孤独感の緩和や人とのつながりを感じることができるよう、交流会の場に参加を促すことが必要と考える。

2)見守りメンバーの活動状況

地域特性に関係なく、地域への愛着、互酬性の規範、近隣との信頼感の築きやすさは高い割合であった。都市部や都市近郊では、近隣と協力した見守り活動等を通して、近隣付き合いを深め、信頼感を築いていくと考えられる。農村部では、互助的なつながりを土台に近隣への信頼感や互酬性の規範を築いていると考えられる。

見守り活動については、住民見守りは、外からの緩やかに見守り、「外で見かける」、「挨拶や普段の会話」からはわかる範囲での見守り活動が行われていることがわかった。住民見守りが可能な範囲として、都市部や農村部では、マンション等や同じ敷地内、都市近郊では、同じ町内と考えていることがわかった。

見守り方法については、都市部では、一人暮らし高齢者が多く、身体の不自由を抱える人がいることから、平成20年度の調査結果と同様に、7日以内に1回訪問する割合が高くなっていった。

見守りに対する気持ちについては、都市部や都市近郊に比べて農村部で2年前と現在双方ともに、「見守りは必要ない」と考えている人の割合が高い傾向にあった。これは、前年度インタビューデータ等から、「高齢者は家族で見るのが当たり前」との意識があることが関係していると考えられる。見守りボランティアが高齢化し、隣家との間隔が広く遠い中で見守り活動を行うことは、負担が大きいと考えられる。そのため、農村部では、見守り拒否や見守り対象者の経済的問題解決のために、地域の連携や協力的体制づくり、見守り活動が大切と考えていることが窺える。都市近郊では、見守り拒否や認知症・精神障害による生活障害に対する相談活動や孤立を防ぐ交流会の開催が必要と考えていた。都市部では、一人暮らしで周囲から孤立している高齢者に対して、人との交流を促す必要性を感じており、相談活動や交流の場の確保が大切との意見が窺えた。

見守り専従の有無別では、見守り専従なしの地域では、同じ町内で見守り範囲と考えていた。見守り活動としては、サービス導入拒否や見守り拒否、経済的問題や認知症による生活障害を抱える対象者の実態を把握し、関係機関と連携して相談活動を行い、対象者の孤立を防ぐ交流の場を開催する必要があると考えていた。見守り専従ありの地域では、見守り対象者の見守り活動に加えて、保健・医療・福祉の情報提供や震災の経験から、災害時の対応が住民見守りネットワークを充実させるために必要と考えていた。見守り専従によって、地域見守り組織と見守り専従者等の専門職が、「顔見知りになる」、「お互いの役割がわかる」、「協働できる」の3段階で地域見守りネットワークを構築してきたことから、見守り活動の活性化につながったと考える。

3.組織育成研修プログラムの効果

全体的に、研修を通して「セルフ・ネグレクト」の状態、見守りの必要性を理解することができた。シナリオ劇をとおして、「セルフ・ネグレクト」状態の人の見守り方法について考えたことを地域見守り組織メンバーの見守り活動実践力育成につなげており、研修効果と考える。

地域特性格別では、都市部で、セルフ・ネグレクト(自己放任)事例が身近に存在し、他の地域に比べて、見守りの必要性を感じている。見守り専従の有無別では、見守り専従ありの地域で、「セルフ・ネグレクト」について「知っていた」人の割合が高かった。そのため、シナリオ劇の事例を通して

「セルフ・ネグレクト」の人の気持ちをより深く考えることができたと考える。しかし、「セルフ・ネグレクト」状態にある人について見守りの必要性を感じている人の割合は、見守り専従なしの地域で高かった。この理由として、研修参加者は、見守り専従なしの地域で男性が多かったことから、より身近なこととして感じられたと考える。一方、見守り専従ありの地域では、地域見守り組織メンバーによる見守りと専門職による見守りで重層的に見守りを行っている。見守り拒否等支援困難なケースへの早期介入システムができてきている成果と考える。

研修を通して、住民見守りの限界に対し、見守り可能な範囲を意見交換し、活動を活性化させる内容と方法を考えることができた。このことから、都市部・見守り専従ありの地域では、近隣と協力した見守り活動を通して、生活面で協力のできる付き合いを深めることができた。このことから、組織育成研修プログラムは、地域見守り組織メンバーの活動を活性化につながり、効果的であった。

4.先進的見守り組織・活動実践地域の視察

視察した大牟田地域の専門職は、見守り組織の構築過程に意図的に関わり、情報収集や住民と関係機関が交流する場を設けながら共通問題を明確化し、その解決に向かって相互的な支援関係が築けるよう働きかけ、その結果、先駆的な活動と認められる活動と組織構築過程であった。

地域で働く専門職は、基盤となる住民との相互信頼関係を築いた上で包括的継続的支援が可能となる地域包括ケアシステムの整備に向けて段階的な働きかけを行い、地域住民組織等のインフォーマルな組織づくりと並行して、ネットワーク構築を行っていた。これらのネットワークは、地域に潜むリスクを抱える高齢者の見守りや早期発見ができ、フォーマルサービスでは行き届かない部分に支援やサービスを行渡らせ、互いに補完しあうことができる点で有益であり、高齢者にやさしい、安全なまちづくりに繋がっていた。

大牟田市の認知症高齢者支援のための小・中学校生対象の「絵本教室」、徘徊高齢者早期発見・支援のための「徘徊模擬訓練」の実践活動に視察を兼ねて参加した。本市が他市と違う点として気づいたのは、行政の福祉担当職員が1名以上、全ての地域組織グループの運営に1メンバーとして昼夜の関係なく一緒に活動していたことである。これにより住民や民間専門職等の信頼感も高かった。本市の組織活動過程を行動変容のステージモデルに沿って分析してみた。これより得られたヒントは、これから高齢者見守り組織づくりに取り組む市町村や活動が難航している地域の活動促進の参考になるものと考えられる。

E. まとめ

1. 見守りチェックリストの有効性

- 全体的に、見守りチェックリストの有効性を感じている人の割合が高かった。
- 都市部では、見守りの独自の判断基準作成がされている地域があるため、今回のチェックリストの有効性を感じない人が多かったのではないかと考える。
- 隣の家との間隔が広く、距離のある農村部では、見守りチェックリストの使いやすさ、内容の適切さ、判断基準としての有効性を感じる人が多かった。
- 見守り専従なしの地域では、見守り活動について相談する人がいないため、「見守りチェックリストが役に立つ」、「判断基準となった」と答えた人の割合が高かった。
- 見守り専従ありでは、役割分担が明確化されているために、見守りチェックリストがなくとも、専門職との連携・協力体制づくりができていたためだと考える。

2. 見守り組織体制の変化

- 対象者の属性では、都市部で一人暮らしが多く、都市近郊では身体不自由を抱え、歩行で移動できない人が多く、7日に1回の訪問による見守りが行われていた。
- 農村部では、互助的な繋がりがあり、近隣への信頼感や互酬性の規範を培い、地域の幅広い人との交流を通して、見守り活動が行われているが、サービス導入拒否や本人の経済的問題など解決のために、見守り活動や連携・協力体制づくりが必要と考えていた。
- 都市近郊では、見守り可能な範囲は、同じ町内と他の地域より広い範囲で、見守り拒否や認知症・精神障害の生活障害のケースへの相談活動や交流会の開催が必要と考えていた。
- 見守り専従ありの地域では、見守り専従者と住民ボランティアの役割分担が明確にされているため、住民は、普段の声かけや外出時に様子を伺う安否確認など、「おせっかい」「緩やかな見守り」の役割を担っていると考えられる。
- 見守り専従ありの地域では、見守り拒否や認知症・精神障害の生活障害の事例に対する見守りの必要性を感じており、必要時介入できるよう情報提供や相談活動が必要である。

3. 組織育成研修プログラムの効果

- 都市部ほど、セルフ・ネグレクト事例が身近に存在し、見守りの必要性を感じていた。
- 農村部で、セルフ・ネグレクト事例への見守りの必要性を感じる人の割合が高かった。これは、農村部の研修参加者は男性が多いことから、用いた事例は男性の事例であったため男性は、より身近なことと感じることができたためと考える。

- ・この研修によって、セルフ・ネグレクトへの理解、見守りの必要性を感じている人が多く、研修でより理解を深めることができていた。
- ・研修を通して、セルフ・ネグレクト(自己放任)の見守りをより強く感じたのは、見守り専従なしの地域であった。

「セルフ・ネグレクト」状態の人の見守りの必要性を考える機会となったこと、見守り活動の実践力育成につながったことから、研修プログラムは有効であったと考える。

F. 健康危険情報：なし

G. 研究発表：別紙4

- 1) 前原なおみ,川井太加子,山本美輪,津村智恵子;孤立高齢者と見守り活動メンバーの係わりと課題,第7回日本高齢者虐待防止学会(広島),2011,p48
- 2) 山本美輪,川井太加子,津村智恵子,前原なおみ;高齢者の孤立死防止活動と住民意識の関連と実態,第7回日本高齢者虐待防止学会(広島),2011,p85
- 3) 鍛冶葉子,榊田聖子,津村智恵子,前原なおみ,山本美輪;地域高齢者見守り組織が活用できるチェックリスト(その1),第7回日本高齢者虐待防止学会(広島),2011,p78
- 4) 榊田聖子,鍛冶葉子,津村智恵子,前原なおみ,山本美輪;地域高齢者見守り組織が活用できるチェックリスト(その2),第7回日本高齢者虐待防止学会(広島),2011,p79
- 5) 前原なおみ,津村智恵子,金谷志子;高齢者見守り組織から町づくりの展開,第51回日本社会医学会総会(大阪府柏原市),2011,p85
- 6) 鍛冶葉子,榊田聖子,津村智恵子,前原なおみ,山本美輪;地域高齢者見守り活動における都市部と山村部の比較について,第51回日本社会医学会総会(大阪府柏原市),2011,p58
- 7) 藤田俱子,金谷志子,河野あゆみ,津村智恵子;介護心中事例を通した見守り組織の学び(第1報),第13回日本地域看護学会(札幌),2011.
- 8) 金谷志子,藤田俱子,河野あゆみ,津村智恵子;介護心中事例を通した見守り組織の学び(第2報),第13回日本地域看護学会(札幌),2011.

H. 知的財産権の取得：なし

報告日： 年 月 日 実施者名：

見守りチェックシート

見守りの対象者	名前		年齢	才	
	住所		電話番号		
	世帯の状況	一人暮らし・高齢夫婦・子と2人の世帯・家族と同居・()			
	身体不自由	あれば具体的に：			
	緊急連絡先	あり(高齢者との関係：)・ なし・ わからない			
	経済状態	気になることあり(収入なし、家族の失職・金銭的取等、その他) ・ なし			
移動	歩行・杖・車椅子・その他()		[] ()		

【チェック項目】

A 生活の様子	1	ポストに郵便、新聞がたまっている カーテン・戸口が閉まりっぱなし、夜や家周りの覗きかけ	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	2	家や家の周囲が散らかっている、悪臭がする、ねずみ、ゴキブリなどの害虫が発生	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	3	夜遅くなっても家の明かりがつかない	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	4	持物が悪そうだが、選別している様子がない	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	5	どなり声、泣き声がする、不自然な痛・アザがある	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	6	隣近所を見ない、物音がしない、近隣とのかわりなし	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	7	不審者が出入りしている	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	8	無気力又は無表情、意欲・生気が感じられない	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	9	近所の人とのトラブルが多くなった	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	10	顔色が以前より悪れている、汚れている	1 はい	2 いいえ	3 わからない
B 日常生活	11	ガス、暖房の消し忘れなど火の不起来が増えている	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	12	食料が腐じにくいと感じる	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	13	自分で家内を移動できない(杖・車椅子を含む)	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	14	転倒や事故などにあった	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	15	同じこもり(外出週1回以下)、買物ができない	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	16	最近頻りになる家族の死(2ヵ月間)に遭遇	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	17	最近転倒、長期入院から退院した	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	18	隣国でも毎日本人は弁当購入	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	19	屋外に長時間1人でのいる	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	20	食事が摂れていない、家事ができていない	1 はい	2 いいえ	3 わからない
C 家族関係	21	必要な医療や福祉サービスを中断・利用していない	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	22	家族との接触が少ない (單獨独居、同居家族と必要最低限の会話)	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	23	正月3が日は誰とも過ごしてない、一人だった	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	24	眠れない、不安や心配事などがありますか	1 はい	2 いいえ	3 わからない

C 認知症を疑うサイン	25	服薬や髪の手入れにかまわなくなった、入浴を後編に遅がる・身体の汚れ・失禁などあり	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	26	よく週に迷い帰宅できない、歩道脇に不審がられる	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	27	鍵などの大事なものの置き忘れ、しまい忘れが目立つ	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	28	ガス、暖房の消し忘れなど火の不起来が増えている	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	29	日時を間違え、約束を忘れている ゴミの日を間違え、最近の集が思い出せない	1 はい	2 いいえ	3 わからない
D うつ状態	30	計算ができない(財布が小銭で一杯、札のみで支払う)	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	31	選物・財布などを盗まれたと疑う	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	32	夜中に平気で外出・活動する 近隣のチャイムをよく鳴らす、トラブルメーカー	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	33	ゴミの出し方が分からない、 ゴミの口が落ちり落ちない	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	34	同じ商品・品物を何度も買っている 薬の飲み忘れ、飲み過ぎが目立つ	1 はい	2 いいえ	3 わからない
35	買ったものと新鮮なもの区別がつかない	1 はい	2 いいえ	3 わからない	
D うつ状態	36	毎日の生活が充実していますか	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	37	これまで楽しんでやっていたことが今も楽しんでできていますか	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	38	以前は楽にできていたことが、今ではおっくうに感じられますか	1 はい	2 いいえ	3 わからない
	39	自分は役に立つ人間だと考えることができますか	1 はい	2 いいえ	3 わからない
40	わけもなく疲れたような感じがしますか	1 はい	2 いいえ	3 わからない	

※O 横は縦の○の数で判断・対応します。 * 特定健康被害チェック項目より抜粋
【チェック項目の対応】 O 横→普段どおり、あいさつや声をかける、
1 横→訪問したり、電話をかけて様子を見る、2 横以上→地域包括支援センターに相談

◎ABC 欄のチェック項目のうち、1 つでも「はい」に○がついた人は、一応地域包括支援センターにご相談下さい。

チェックシートを記入後、あなたは今後どのように対応したいと考えますか、あてはまるものに、1 つに○をつけてください。

- [] 普段どおり、あいさつや声をかける (頻度 日に 1 回)
- [] 訪問したり、電話をかけて様子を見る (頻度 日に 1 回)
- [] 地域包括支援センターに相談

この方について気になることをお書きください。

ご協力、ありがとうございました。
月 日までに、地域包括支援センターに本チェックシートをお渡し下さい。

山田：そう。

友蔵さんは、ボンボンと一生懸命話しています。
丸尾は、話を聞いています。

二十よね。

再び

丸尾：「そうですか、息子さんが電話くれても、電話じや伝わらないこともありますよ。一人じやさびしいですよ、わかりますよ。」

友蔵：ひろ

囲碁教室の知りあいの方も、奥さんがおられるんでしよう。

奥さんを亡くされた友蔵さんの気持ちは、わかってもらえないですよ。

つらいですよ。ぼくには、友蔵さんの気持ちは、わかります。

「いや、友蔵：「そうか、わかってくれるか。あんただけや、ありがとう。」

「……わし、浄水器買っわ。なんぼや？」

丸尾：「え！いいんですか。無理しなくていいんですよ。」

どう？友蔵：無理ぢやうで。わしも水くらい飲むし。」

丸尾：「ありがとうございます。この浄水器は超特別なんで、値段も張るんです。」

20万円なんです……

謎のセール友蔵：「年金もあるし、大丈夫や。」

友蔵：「はい、丸尾：「本当にありがとうございます。では、ここにお名前書いていたでいて……印鑑と……」

謎のセール「はい、契約書ができました。来月、口座から代金引き落としになります。」

商品はそれからお届けします。また来ますね。ありがとうございます。」

友蔵：「浄水、友蔵：「また来てや。待つてるで。」

丸尾：「それ

丸尾は帰って行きました。

友蔵：丸尾さん、ほんまにええ人やな。

20万はきついけど、あんなけ話聞いてもろたんやからな。

今度いつ来てくれるんやろ。……おや……

テーブルの上には、先日ポストに入れられていたチラシが無造作におかれています。

丸尾：「じゃ

友蔵：「丸尾

友蔵：「なんや……」

「警察からのお知らせ

最近、家庭訪問で、浄水器を売りつけられる被害が続出しています。

犯人は●歳くらいの男……」

……まさか……わし……買って……どうしよう。

丸尾：友蔵
友蔵：ああ
丸尾：うれ

以後、友蔵さんは、いつそ家に閉じこもりがちになりました。

友蔵さんは、ボンボンと一生懸命話しています。

丸尾は、話を聞いています。

丸尾：「そうですか、息子さんが電話くれても、電話じや伝わらないこともありますよ。一人じやさびしいですよ、わかりますよ。」

囲碁教室の知りあいの方も、奥さんがおられるんでしよう。

奥さんを亡くされた友蔵さんの気持ちは、わかってもらえないですよ。

つらいですよ。ぼくには、友蔵さんの気持ちは、わかります。

友蔵：「そうか、わかってくれるか。あんただけや、ありがとう。」

「……わし、浄水器買っわ。なんぼや？」

丸尾：「え！いいんですか。無理しなくていいんですよ。」

友蔵：無理ぢやうで。わしも水くらい飲むし。」

丸尾：「ありがとうございます。この浄水器は超特別なんで、値段も張るんです。」

20万円なんです……

友蔵：「年金もあるし、大丈夫や。」

丸尾：「はい、丸尾：「本当にありがとうございます。では、ここにお名前書いていたでいて……印鑑と……」

はい、契約書ができました。来月、口座から代金引き落としになります。」

商品はそれからお届けします。また来ますね。ありがとうございます。」

友蔵：「また来てや。待つてるで。」

丸尾：「それ

丸尾は帰って行きました。

友蔵：丸尾さん、ほんまにええ人やな。

20万はきついけど、あんなけ話聞いてもろたんやからな。

今度いつ来てくれるんやろ。……おや……

テーブルの上には、先日ポストに入れられていたチラシが無造作におかれています。

友蔵：「丸尾

友蔵：「なんや……」

「警察からのお知らせ

最近、家庭訪問で、浄水器を売りつけられる被害が続出しています。

犯人は●歳くらいの男……」

……まさか……わし……買って……どうしよう。

以後、友蔵さんは、いつそ家に閉じこもりがちになりました。

浄水器の代金は、口座から振り落されましたが、浄水器は届きませんでした。息子にも、誰にも相談できず、そのことが余計に友蔵さんを孤立させていくことになりました。

友蔵さんが、訪問販売の被害にあつてから、誰にも相談できないまま、3か月が経ちました。

佐々木・田中：友蔵さん、こんにちは。友蔵さん。

佐々木：留守やろか。

田中：家の中に誰かいる気がしますが。おられるはずですよ。

佐々木：そうか。ほんならもつかい呼んでみよか。

佐々木・田中：友蔵さん、こんにちは。

細く戸が開いて友蔵さんが顔を出しました。

友蔵：誰や？

田中：こんにちは。私は、見守りボランティアの田中といいます。

今日は、民生委員の佐々木さんと一緒に、市役所からの広報を届けに来たんですが、ちょっとお邪魔してよろしいですか？

友蔵：今、忙しいわ。またにしてんか。

田中：そうですか。じゃあ、ここでちょっとお話をさせてください。お困りのことか、ないですか？

友蔵：ない。

佐々木：最近、あんまりみかけへんから、どうしてさんやろと思つたんや。

元気で安心してたわ。囲碁教室で一緒やった山田さんとか高橋さん、

二人も心配してはつたで。

友蔵：ふん、わは大丈夫や。…今忙しいから。

田中：お買ひものとか、洗濯とか、掃除、どうされてますか？

友蔵：してる。

佐々木：息子さんおつたやんな。息子さんから連絡とかあるんか？遊びに行ったりしてるの？

友蔵：行つてる。

佐々木：月に一回、その公民館で老人会やつて、みんな来てくれてんねん。

友蔵さんちよかつたら来てく…

友蔵：今忙しいわねん！

友蔵さんは、ヒシキッとして戸を閉めてしまいました。

仕方なく、佐々木さんと田中さんは、家の外から声をかけることにしました。

佐々木：今度●日に老人会するから、待つてるわな。

田中：お困りのことがあったら、いつでもご連絡ください。

ポストに電話番号のメモ、入れておきますから。

掃り道、佐々木さんと田中さんが何やら話しています。

佐々木：友蔵さん、えらい髪ボサボサやつたな。髪もえらい伸びてたで。

田中：そうですよ。多分お風呂も入つてないですよ。匂つてましたよな。

佐々木：そやなあ。服もえらい汚れてたしな。

田中：家の中、ちらつと見えたんですが、ずいぶん散らかつてました。

佐々木：わしも見た。それに異臭せえへんかったか？

田中：しましたね。ゴミ捨てできないうのかなという感じがしました。

本人は何も困つてない。とおっしゃるんですが…心配ですね。

佐々木：困つてへんはずないと思ふんやけどな。

それに、ちよつと気になることがあるねん。

田中：何ですか？

佐々木：近所の人から聞いたんやけどな、ちよつと前に、友蔵さんとこに、若い男が出入りしてたらしいわ。

田中：若い男って、息子さんちやいますか？

佐々木：いや、どうも違うらしい。見たことないヤツやつて言うてたからなあ。

友蔵さんに直接聞いてみようと思つたんやけど、開ける感じやなかったしな。

田中：誰やつたんでしょね？

身なりは汚れてるし、家の中も散らかつてるし。

それに、ようわからんヤツが出入りしてた言うんではねえ。

ほんまに心配ですよな。

田中：佐々木どうしたもんやろなあ…

これ以上は終わります。友蔵さんのようなことは、私たちの身近に起こりうる事です。

①この劇を一覧になって、友蔵さんのどんなところが気になりましたか。

②もしあなたが、以下の場合なら、どうすればよかつたのか考えてみましょう。

- ・友蔵さん本人なら
- ・ひろし、花子夫妻なら
- ・囲碁教室仲間なら
- ・近所の人なら
- ・民生委員や見守りボランティアなら

高齢者等のセルフ・ネグレクト（自己放任）を防ぐ
地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究〈分担1〉

研究分担者 河野 あゆみ 大阪市立大学看護学研究科 在宅看護学教授
研究協力者 藤田 俱子 大阪市立大学看護学研究科 地域・在宅看護学講師

研究要旨：セルフ・ネグレクト（自己放任）状態にある高齢者の理解と支援の必要性の認識を高める研修会及び見守り基準を用いた見守り活動の支援を実施した。研修会ではセルフ・ネグレクト（自己放任）状態にある高齢者の気持ちを知り、支援の必要性を認識することができた。また、見守り基準を用いた見守り活動を試行することで見守りに役立つと感じた見守りネットワークメンバーが多かった。見守り活動に関するネットワークメンバーの共通認識もさらに高まってきている。今後は見守り活動をより効果的なものにするために一定の方略を検討していくことが必要である。

A. 研究目的

セルフ・ネグレクト（自己放任）状態にある中高年者に対して、周囲で関わる一般住民にとって支援の必要性の認識は低い。そこで、セルフ・ネグレクト状態にある高齢者について感情体験することで、セルフ・ネグレクト状態にある高齢者の気持ちを理解し、見守りの必要性の認識を高める研修会と見守り基準を用いた見守り活動の支援を試みた。本研究は、見守り組織を対象にセルフ・ネグレクト状態にある高齢者についての理解と支援の必要性の認識の変化を明らかにすることと見守り基準を用いた見守り活動の有用性を検討することを目的とした。

B. 研究方法

今年度は研修会を2回実施した。

第1回研修会の対象者は泉南市見守り組織構成員と自治体職員の27名である。方法はセルフ・ネグレクト状態にある高齢者を理解し支援を話し合う講義とグループワーク及び見守り基準として見守る項目を示した見守りチェックリストを用いた見守り活動の説明を実施した。最後に研修評価アンケートを実施した。

講義とグループワークの内容と流れは①セルフ・ネグレクト状態に関する講義、②8名程度のグループになってグループワークとしてシナリオによるセルフ・ネグレクト状態にある高齢者事例の疑似体験、③グループでの当事者の気持ちや気になるところ、見守り組織として何ができるかの話し合いとした。その後各グループの話し合いを共有した。

見守りチェックリストを用いた見守り活動の説明は見守りチェックリストの項目として日常生活に関する項目を8項目、観察や会話から情報を得られる項目を13項目、認知症を疑うサインに関する項目を11項目、うつ状態に関する項目を5項目の合計37項目について口頭で順番に説明し、該当する場合と該当しない場合の回答個所を対象者と共に確認した。見守り対象は21年度実施した見守り対象者

を再度見守り対象とするよう依頼した。評価として見守りチェックリストの使用に関するアンケートを実施した。チェックリスト、アンケートの回収は期日を設け、地域包括支援センターに提出してもらった。

第2回研修会の対象者は泉南市見守り組織構成員と自治体職員の37名である。方法は見守りチェックリストを使用した見守り活動の結果報告を実施した。

報告の内容はチェックリストを用いた見守り判断の結果と地域包括支援センターによるフォローアップで把握した訪問対象者の状況説明を行った。（倫理面への配慮）

研究については研究の趣旨と参加が自由意志であること、途中の参加取りやめや不利益を被らないことを説明し、研究参加とICレコーダーの使用について同意を得た。アンケートは回答をもって同意とみなした。また、見守りチェックリストの回収先は地域包括支援センターとし、見守り対象者の個人情報には明らかにされないよう配慮した。第2回研修会での見守り活動の結果報告において対象者の個人情報は秘匿して行われた。

C. 研究結果

第1回研修会の対象者27名のうち研修プログラムを受ける前はセルフ・ネグレクトについて「全く知らなかった」対象者は16名（59.3%）、「状態があることは知っていたが想像できなかった」対象者は4名（14.8%）、「言葉は知っていたが意味は知らなかった」対象者は3名（11.1%）、「知っていた」対象者は4名（14.8%）であった。研修後の理解について「全く分からなかった」対象者が1名（3.7%）、「まあ分かった」対象者が8名（29.6%）、「良く分かった」対象者が18名（66.7%）と有意に（ $p < 0.001$ ）変化した。研修を受ける前のセルフ・ネグレクト状態にある者に対する支援の必要性の認識について24名のうち「全く感じていなかった」対象者は8名（33.3%）、「あまり感じていなかった」対象者は3名

(12.5%)、「少し感じていた」対象者は6名(25.0%)、「よく感じていた」対象者は7名(29.2%)であった。研修後の認識については「全く感じなかった」対象者が1名(4.2%)、「少し感じた」対象者は4名(16.7%)、「よく感じた」対象者は19名(79.2%)と有意($p < 0.001$)に変化した。また、参加者のうち17名(63.0%)は当事者の気持ちをよく考えることができたと回答した。グループディスカッションでは主人公のセルフ・ネグレクト状態にある高齢者の状況について息子との関係性に関すること、独居で暮らす特性、男性の特徴、行動の状況に関する発言が見られた。地域で取り組むべきこととして高齢者に問題が起らないように予防的にかかわることなどの重要性が示された。また、高齢者へのかかわり方として、時間をかける、コミュニケーションを工夫する、近隣を巻き込む、地域で組織的にかかわる、地域で高齢者を支える仕組みを作るなどの発言がみられた。

回収できた見守りチェックリストは21枚(前年度38枚)であった。チェックリストの結果は「普段通りあいさつや声掛けを行う」が10枚(47.6%)と前年度の21枚(53.8%)より少なかった。「訪問したり、電話をかけて様子を見る」は6枚(28.6%)と前年度の10枚(25.6%)と同程度であった。「地域包括支援センターに相談する」は2枚(9.5%)と前年度の0枚(0.0%)から増加した。未記入は3枚(14.3%)と前年度の8枚(20.5%)よりも減少した。

項目の付け具合では未記入、または「わからない」を選択していた見守りチェックリストが生活の様子、観察・会話の項目では各6枚(28.6%)、認知症の疑いのサインの項目では10枚(47.6%)、うつ状態の項目では11枚(52.4%)であった。

見守りチェックシートの回収により把握した21件についてサービス利用状況やこれまでの関わり、チェックシートの結果の「地域包括支援センターに相談する」となっている事例など総合的に判断し、4件について地域包括支援センターの専門職が訪問を実施した。いずれの事例についても訪問を実施した状況では、既にサービス利用にまでつながっていたり、自立と判断できる事例であった。

見守りチェックリストの使用に関するアンケートは11枚の回収があった。見守りチェックリストの使いやすさは使いやすいと思う者が7名(63.6%)、思わない者が1名(9.1%)、無回答が3名(27.3%)であった。項目内容は適切だと思う者が10名(90.9%)、思わない者が1名(9.1%)であった。見守りチェックリストが見守るべき対象を判断する基準として役に立った者が8名(72.7%)、役に立たなかった者が2名(18.2%)、無回答が1名(9.1%)であった。見守りチェックリストが専門職へ連絡する基準として役に立った者は7名(63.6%)役に立たなかった者2名(18.2%)、無回答2名(18.2%)であった。

D. 考察

研修前に「セルフ・ネグレクト」の言葉の意味や状態を知っている対象者は少なく、見守りの必要性を認識していない対象者が多かった。しかし、研修後にはセルフ・ネグレクト状態の理解や見守りの必要性の認識は有意に増加し、本研究はセルフ・ネグレクト状態にある対象者への支援の必要性を認知できる介入となる可能性が示唆された。また、地域の支援が必要な高齢者に関する情報を地域の見守り組織で共有する必要性が認識されていた。

見守りチェックリストに関するアンケート結果では、回答があった11名のうちの60%以上の者は使いやすい、適切である、役に立つと回答しており、ある程度活用できるものと考えられる。しかし、本年度の見守りチェックリストの回収数も21枚であり、決して高い回収率とはいえなかった。また、認知症のサインを示す項目やうつ状態については「わからない」やチェックの未記入も多いことにも着目する必要がある。また、チェック項目の中には、高齢者自身や家庭のことを詳細に把握していなければ回答できないため、回答するのが難しいとの意見もみられた。したがって、チェック項目については、内容を吟味し、外見から観察できる簡明なものと、対象者自身にかかわりながら把握できる詳細なものと区別して、活用目的に応じた使用方法があるのではないかと考える。

E. 結論

本研究プログラムによりセルフ・ネグレクト状態にある高齢者の気持ちとセルフ・ネグレクト状態の理解、支援の必要性の認識が高まった。見守りチェックリストは見守るべき対象を判断する基準や専門職へ連絡する基準として役立った。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

藤田俱子, 金谷志子, 河野あゆみ, 津村智恵子, 介護心中事例を通した見守り組織の学び(第1報): 助けを求められなかった介護者事例から, 日本地域看護学会第13回学術集会講演集, 165, 2010.

金谷志子, 藤田俱子, 河野あゆみ, 津村智恵子, 介護者心中事例を通した見守り組織の学び(第2報): 地域見守り組織メンバーの立場から関わりを考える, 日本地域看護学会第13回学術集会講演集, 166, 2010.

H. 知的財産権の出願・登録状況: なし

厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）
分担研究報告書

高齢者等のセルフ・ネグレクト（自己放任）を防ぐ
地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究〈分担 2〉

分担研究者 和泉 京子 大阪府立大学

研究要旨 近郊都市地域である A 市の高齢者等の見守り組織活動に携わる住民へ研修およびチェックリストの試行と評価を行った。その結果、見守り組織への若い層の参画といった課題、連携の重要性が示され、また、チェックリストの有効性、研修によるセルフ・ネグレクトの理解および見守りメンバーの相互の結びつき等の効果が明らかになった。見守りチェックリストの活用および研修の有効性が明らかになった。

A. 研究目的

1. 平成 21 年度の見守りチェックシートの結果から、A 地区と他の地域の見守り実態を報告し、共通点及び相違点、A 地区の見守り対象や方法の特徴を共有すること。それにより、A 地区の今後の見守りのあり方を検討すること。
2. セルフ・ネグレクトについての定義、実態、発生要因と孤独死との関連等の知識の提供を行うことにより、地域での見守りにおけるセルフ・ネグレクト予防・早期発見の重要性を啓発すること。
3. A 地区の見守りネットワーク地域ケア推進チームメンバーにセルフ・ネグレクトの事例の寸劇を通して見守りに関するグループインタビューを行い、A 地区におけるセルフ・ネグレクト予防・早期発見の取り組みや課題を明らかにすること。

B. 研究方法

研修およびチェックリストの試行と評価を A 地区の見守りメンバーに実施した。

研修内容は、平成 21 年度の見守りチェックシートの結果をふまえた地域の見守り実態およびセルフ・ネグレクトについての講義、セルフ・ネグレクトの事例の寸劇を通しての見守りに関するグループワークである。また、改良されたチェックリストを試行してもらい、その評価を行った。

甲南女子大学看護リハビリテーション学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。

C. 研究結果

1. A 地区においては、訪問を重視して細やかに支援している実態が明らかになった。しかし、見守りを担うメンバーの年齢層で最も多いのは 70 歳代であり、見守りの次の世代を担う 50 歳代、60 歳代の参画が急務な課題であると考えられた。
2. 見守りの困難な対象者への対応に苦慮している実態があった。一方、困難な場合は抱え込まず市等への連携がとれていた。また、見守り対象を高齢者からセルフ・ネグレクトの視点より若い層へも広げていた。
3. 研修を重ねるうちに交流が深まる様子がみられ、見守りメンバーの相互の結びつきが強まった。

4. チェックリストにより支援が必要な対象者が把握でき、役に立ったと評価された。

D. 考察

見守り組織への若い層の参画といった課題、連携の重要性が示され、また、チェックリストの有効性、研修によるセルフ・ネグレクトの理解および見守りメンバーの相互の結びつき等の効果が明らかになった。

E. 結論

見守りチェックリストの活用および研修の有効性が明らかになった。

厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）
分担研究報告書

高齢者等のセルフネグレクト（自己放任）を防ぐ
地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究〈分担 3〉

研究分担者 臼井 キミカ 甲南女子大学

研究要旨:この研究では堺市西区地域包括支援センター管轄地域見守り組織メンバーの住民と保健医療福祉職等に対して、地域高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らせるまちづくりを目指して見守り支援者のスキルアップを図り、ネットワークを構築することを目的にした組織育成プログラムを企画・実施した。アンケートおよびインタビュー結果と研修での対象者の発言内容分析とを分析した結果、参加者は地域見守り活動の必要性和限界を理解し、目指すべき各自の活動の具体的なイメージを持つことができ、見守り活動に主体的に取り組むことにつながっていた。

A. 研究目的

堺市西区地域包括支援センター管轄地域見守り組織メンバーと保健医療福祉職を対象に、①支援者のスキルアップを図る ②ネットワーク構築の方法論を学ぶことを目的に研修プログラムを企画・実施した。本報告では、アンケート調査ならびにインタビュー調査と、3年間の活動のまとめとしてDVDを製作し、活動を評価した結果を報告する。

B. 研究方法

見守り組織メンバーと保健医療福祉職を対象に、「高齢者見守りネットワークづくり～高齢者に関する社会保障を知ろう～」をテーマにしたキーコーディネーター養成研修（3回シリーズ）と、市民向け研修「高齢者が安心できるまち、西区を目指して～孤立しがちな高齢者のために、何ができますか～」を加えて合計4回の研修会を開催した。研修最終会では「これまでの歩みを振り返って」と題して、3年間の活動の概要を手作り製作したDVDで振り返り、これからの西区のネットワークのあり方を考え、平成23年度に向けての課題を明らかにした。

1. 研修参加者が考えるこれからの西区「こんな西区になったらいいな」調査

対象：「西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会」最終回の参加者80名。方法：自記式アンケート調査（集合調査）

2. 「西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会」3年間の評価のための調査

対象：「西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会」参加者の代表者。方法：個別面接。

3. 3年間の「西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会」活動状況のまとめ

対象：3年間の「西区高齢者ちょこっとネットワーク研修会」参加者と活動内容。方法：35分間のDVDを製作。上記の研究時期はいずれも平成23年3月である。

倫理面への配慮:対象者には研究の趣旨や個人情報保護について説明し、アンケート調査ではアンケートの提出をもって承諾とした。なお、

この研究はA大学の研究倫理委員会で審査を受けて実施した。

C. 研究結果・考察

1. アンケート調査：配布数は80部、回収数は52部（回収率65.0%）であった。分析の結果、参加者がイメージする地域・西区とは、＜日常の横のつながり＞、＜子どもから高齢者まで顔見知り＞、＜顔が見える関係づくり＞、＜小単位で気軽に集える＞、＜支援される人も支援者も意欲が持てる＞ような安心・安全な地域である。そのような地域のためには、①生活を見守るサポーターや、ファシリテーターの育成、②ネットワーク研修会の継続、③意識向上のためPR、④必要な時に必要な人に情報提供、⑤わかりやすい言葉での説明や気軽に相談ができる体制、⑥情報の枠を上げ規程等の緩和が必要ととらえていた。

2. 面接調査：面接できたのは6名（男4名、女2名）の校区民生委員や介護保険事業所等の代表者であり、「研修は日々の活動に活かしているか」「今後の課題」「研修会に参加しての感想」について自由に語ってもらった。その結果、①今まではネットワークの存在は知っていてもどのように活かすのかわからなかったが、自ら体験したことで地に足のついた活動につながった。②研修内容も有意義であったが、地域包括支援センター等の職員が身近に感じられたことが最大の収穫。困った時に相談できる人の顔が浮かぶようになり、見守り活動での緊張感や負担感が解れた。③当初は点のつながりだったが、今は顔の見える線のつながりに発展した。④当事者の気持ちに触れることで、問題を多角的に正しく理解でき、自分のことや、地域のこととして受け止められるように意識が変化した。⑤認知症は特別なことではなく、できることが多くあり、今あることを最大限に活かすことの大切さを実感できた。

⑥これからは高齢者のみのネットワークではなく幅広い分野・対象に広げていくことが大切。

3.3年間の活動のまとめとのDVD製作：

1)35分間の手作りのDVDを制作し、視聴することで3年間の活動を振り返ることができ、参加者相互のつながりを一層強めることと、今後の課題を明らかにすることにつながった。

2)研修について

今年度の研修参加スタイルは参加する研修内容を自らを選択する方式の選択型研修とした。研修内容は、日常の仕事・活動に活かせる内容を取り上げて、出席者は個々のレベルに合わせて参加することにした結果、高齢者を支えていく中で、①支援者側の不安等の心理・情緒的受け止めの場、②課題を抱えている方々の声を受け止める場、③課題対応を多面的に具体的に話し合う場、④専門職と地域で活動している民生委員やボランティアの方々とを相互につなげる場となっており、有意義な研修となった。インタビューやアンケート結果では、今回だけに終わらずこのような研修を今後も続けて欲しいという声が多かった。

3)参加者の研修会参加時の発言内容の分析

研修会参加時の発言内容から民生委員等が行う見守り時に心得ておくべき要点は以下のよう

にまとめられた。
①見守りで大切な視点は、何となくいつもと違う、何か変であると「気づく力」と、「少しのお節介」が必要である。

②見守りには対象者との信頼関係が大切であり、関係性の取り方と、聞き方のコツが必要であるが、それは決して難しいことではない。

③自分にできることを無理のない範囲で行い、一人で頑張りすぎない。

④情報には屋外からみて分かるものと、家の中まで入らなければ分からないことなどがあり、その区別を知っておく。

⑤見守りは決して監視になってはいけないことを常に意識する。そのためには自分や自分の家族に置き換えて考えてみるのも一案である。⑥プライバシーの尊重は大切であるが、人の命がかかっている可能性への気づきも同様に大切である。

⑦専門的なことは専門職や行政に任せ、常識の範囲で対応可能なことを行い、住民の立場での限界があることを知って活動する。

⑧チェックシートは見守りのきっかけづくりに有効である。

⑨見守りで最も大切なことは、人にはそれぞれの生き方や価値観があり、それを認めながら暮らし続けられるように共に考える姿勢をもつこと。

⑩チェック項目数は、必要最小限の項目数を厳選し、支援者の負担感を少なくする。

以上のように、見守りの必要性の理解と、見守り時の留意事項が参加者自らの言葉で語られていた。それらを通してどのように活動したらよいのか各自がイメージでき、自分の持てる時間で

行ったらよいのだという安堵感と共に、事例への理解が深まり、対象者のプライバシーを尊重しつつ、監視されているという意識を少なくするための工夫や具体的な意見、サービスの充実を求める声や、それぞれの地域での課題を明らかにすることができていた。

D. まとめ

ネットワークづくりに向けての活動は、課題はあるものの、顔の見える関係が着実に構築されつつあり、今後は、対象を広げて誰もがいくつになっても住みなれた地域で安心して暮らせる街づくりを目指すことを共通理解した。

今後の「ネットワーク」の展開は、これまでの活動や研修会での内容を総括して、広く参加者の希望・意見を集約した結果、平成23年度は「顔の見える関係をもっと身近なものに」をキャッチフレーズに以下の3点を目標にすることになった。

①さまざまな視点で広く市民に対して情報を発信する。

②高齢者分野だけでなく、他の分野の機関と連携して研修を企画し、協力者を増やす。

③協力者を増やすことで西区の実態を深く知り、課題をすくい上げていき、区の実態をさらに深く知ることにつなげる。目標達成のために、平成23年度は西区在住の市民・支援者に研修対象を広げて以下のテーマで3回の市民研修を開催することになった。

第1回目：平成23年6月

「高齢者の自殺を予防する(仮)」

第2回目：平成23年9月

「障害者を子どもにもつ親の高齢化～障害者の高齢化、またその親の高齢化に関する問題について考える(仮)～」

第3回目：平成24年1月

「障害者をもつ家族の高齢化を支えるために(仮)」

地縁等のつながりの希薄な都市部という地区特性を考慮した見守りネットワーク構築の研修プログラムであり、3年間と限られた期間では課題は多く残るものの、地区に合わせてプログラムを創意工夫することによって達成可能な範疇にまでこぎつけることができた。

F. 健康危険情報：なし

G. 研究発表：なし

H. 知的財産権の出願・登録状況：なし

厚生労働科学研究費補助金(政策科学推進研究事業)
分担研究報告書

高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ
地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究<<分担 4>>

研究分担者 川井 太加子 桃山学院大学
山本美輪 大阪信愛女学院短期大学 前原 なおみ 甲南女子大学

研究要旨:地域で生活するセルフ・ネグレクト状態の高齢者等の早期発見を可能にする適正な見守り組織のあり方を模索し、地域特性を踏まえた見守り基準の検討を行うことを目的に、チェックシートと使用後のアンケートを行った。

堺市南区の見守り活動は、見守りの組織活動から専門職へ引き継がれており、民生委員等は外から見守る役割を担っている。地域の特性を踏まえた見守り組織のあり方として、項目を厳選し簡易なチェックシートで対応できること、チェックシートを活用した研修や啓発活動は、見守り活動者の知識向上と参加意識に変化をもたらし見守りの必要性の理解につながっており、見守りボランティアの育成とスキルアップと新規見守り対象の発見に活用することが可能であることが示唆された。

A. 研究目的

地域で生活するセルフ・ネグレクト状態の高齢者等の早期発見を可能にする適正な見守り組織のあり方を模索し、地域特性を踏まえた見守り基準の検討を行うことを目的とした。

B. 研究方法

対象:見守り活動を実施している民生委員等

期間:2010年10月12日～2011年2月10日

方法:地域包括支援センターの協力を得て、会議等で研究の目的を説明し、チェックシートと使用後アンケートを配布した。回収箱を設置し、民生委員と地域包括支援センターの専門職に回収を依頼した。見守りチェックシートは、基本属性、詳細編、うつ状態の早期発見、認知症が疑われるサインについて項目ごとに分析し、チェックシート使用後アンケートは、各項目について記述統計量を求め分析した。

倫理面への配慮:甲南女子大学倫理審査委員会の承認を得ている。現地関係専門職および所属長の承認を得、また見守り組織代表および調査対象者に口頭および文書で個別に得た。

C. D. 結果と考察

・ **回収数:**11事例のチェックシートと30枚の使用後アンケートが回収された。

・ **チェックシートについて:**回答者の6割以上は「使いやすい」「内容は適切」と判断していた。また、見守りの判断基準および専門職への連絡基準として「役立った」と回答した者は6割であった。シートの使いやすさでは、項目をわけると個別対応が求められ、さらに見守り組織を充実す

るために必要なものとして、「見守り活動」のほか、「連携・体制」と「交流の場」「実態調査」が2割あげられていた。

・見守り組織体制と現状

回答者の9割は地域への愛着を2年間維持しており、6割は近隣の人々との信頼関係は築きやすく地域貢献の意欲があると回答した。見守る人数は2年前と変化なく、さらに、すべての民生委員は見守りの必要性を理解し、「見守りは必要ない」と回答した民生委員等はいなくなった。

E. 結論

堺市南区の見守りは、民生委員等から見守りの組織活動から専門職へ引き継がれており、民生委員等は外から見守る役割を担っている。その特性を踏まえた地域見守り組織のあり方として次のことが明らかになった。

・チェックシートは、見守り対象によって不必要な項目があり、項目を厳選し簡易なチェックシートで対応できる

・チェックシートは新規対象の発見やボランティアへの教育の視点に活用可能であった

・チェックシートを活用した研修や啓発活動は見守り活動者の知識向上と参加意識に変化をもたらし、見守る視点が明確になった。

F. 健康危険情報:なし

G. 研究発表:なし

H. 知的財産権の出願・登録状況:なし

【研究協力者】湯本尊敏(堺市南区役所地域福祉課課長) 下熊京子(堺市南区地域包括支援センター所長)ほか

厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）
分担研究報告書

高齢者等のセルフネグレクト（自己放任）を防ぐ
地域見守り組織のあり方と見守り基準に関する研究《分担 5》

研究分担者 榊田 聖子 甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科

研究要旨:本研究では、セルフ・ネグレクト状態の高齢者等を早期発見する地域見守り組織のあり方を検討するために、高齢者地域見守り組織メンバー（民生委員・友愛訪問ボランティア）を対象とした組織育成研修プログラムと見守りチェックリストを作成・実施した。研修プログラムでは、セルフ・ネグレクト高齢者の見守りは専門職と地域見守り組織メンバーが協働で見守りを行う必要性についての共通理解を深めることができた。研修の効果として、見守り活動を行う地域見守り組織メンバーは、挨拶や声かけ等の方法で見守り活動を担い、日頃から見守り専門職との連携がとれていることが明らかになった。さらには、地域ぐるみで高齢者を見守るという見守り活動の活性化がみられた。見守りチェックリストは、有効と考えている人は6割を超えていたが、詳細項目は不明なことが多かった。今後、地域見守り組織メンバーと見守り専門職の役割分担が明確化されている地区において、本地区で見守りチェックリストを活用するためには、普段の挨拶や声かけで判断できる項目とする必要がある。

A. 研究目的

平成20年度から実施している本研究の結果から、本年度は、地域見守り組織活動の変化を確認し、組織育成研修プログラムの効果とあわせ、見守りチェックリストの有効性について、検討することを目的としている。

本年度は、前年度アンケート調査協力地区の見守り組織メンバーを対象とした見守りチェックリストの実施を通して、見守り組織メンバーの使用可能な見守り基準の検討を行い作成することである。

B. 研究方法

対象者は、平成20年度の実態調査から継続して研修参加、見守りチェックリストの検討に参加している地域見守り組織メンバー37名、あんしんすこやかセンター見守り専門職5名、計42名である。

依頼方法は、見守りチェックリスト検討に協力を得られた地区を管轄する2ヵ所のあんしんすこやか（地域包括支援）センターで承認を得た後、集会場で実施されている見守り連絡会を通じて、研修と研修後アンケート実施、見守りチェックリスト使用と使用後アンケート実施の依頼を行い、承認を得た。

1. 組織育成研修プログラム

平成22年度は、平成21年度の研究および見守りチェックリスト結果の報告、セルフ・ネグレクトに関するミニ講義、セルフ・ネグレクト状態にある一人暮らしの男性高齢者が周囲から孤立していくシナリオを用いた寸劇後、グループディスカッションを通して、セルフ・ネグレクト状態にある高齢者の見守りの必要性を再確認した。研修全般

を通して、見守りを拒否する対象者を見守るための具体的方法を考え、今後の地域見守り組織活動に役立てる内容とした。研修の効果を検討するために、研修後アンケートを実施した。

2. 見守りチェックリスト

見守りチェックリストの項目は、生活の様子12項目、観察・会話13項目、認知症を疑うサイン11項目、うつ状態5項目とした。使用後アンケートの項目は、見守りチェックリストの内容や使いやすさ、見守り判断基準として役立ったか等4項目とした。また、平成20年度から本研究で介入したことにより、地域見守り組織のあり方の変化を確認するために、見守り地域に関する項目、見守り活動に関する項目を追加した。

また、見守りチェックリストと同時に使用後アンケートを配布した。研修終了後、見守りチェックリストの必要性、内容および使用方法、倫理的配慮を全体・個別で説明したのち配布した。研修後アンケート、見守りチェックリストと使用後アンケートは記入後、あんしんすこやかセンターに提出してもらった。

倫理的配慮:本研究の実施にあたり甲南女子大学看護リハビリテーション学部倫理委員会の承認を得た。研究協力者には、研究の趣旨・内容・方法に関する説明、研究への参加・離脱は自由意志であること、調査内容に関するプライバシーの保護を厳守すること、ICレコーダーの使用等について、文書および口頭で説明を行い、承諾を得た。見守りチェックリストとアンケートに関しては、回答・提出を持って同意を得たこととした。

C. 研究結果

1. 見守り組織活動の現状と変化

研修をとおして、地域見守り組織メンバーは、セルフ・ネグレクト状態にある見守り対象者に対し、自分たちで行う見守りの限界を共通理解した。見守りの限界を克服するために、近隣や関係者との協力や地域全体で見守りを行う必要性と考えていた。介入後、段階的に、声かけや訪問のタイミングを見計らい、対象者が SOS を出せるような見守り方法を検討し、実施につなげていた。

「近隣の方との信頼関係は築きやすいですか」は、73.9%が「築きやすい」、「まあ築きやすい」と答えた。「地区の方は近隣の方の役に立ちたいと思っていると思いますか」は 56.5%が「とても思う」「そう思う」と答えた。「現在住んでいる地区にどの程度愛着がありますか」については、91.3%が「とてもある」、「まあ愛着がある」と答えた。「あなたは地区内(見守り地区)のご近所とどのような付き合いをされていますか」については、「生活面での協力」21.7%、「立ち話程度」69.6%であった。

「見守りの必要性に対するあなたの気持ち」について、「見守りは絶対必要」、「やや見守りが必要」は 2 年前 87.0%から現在 78.3%へ、「あまり必要ない」と思う人は 2 年前 0.0%から現在 8.7%へ変化していた。「住民見守りはどこまでならできると思えますか」については、「マンションの同じ敷地内」が 65.2%と最も多かった。

「住民見守りができないと思うもの」については、「見守り拒否」、「健康状態の悪化」、「重度の認知症による生活障害」、「精神疾患による生活障害」があげられた。

2. 見守りチェックリスト

見守り対象者の状態については、「生活の様子」チェック項目では、「会話が通じにくい」3 名、「観察・会話」によるチェック項目 12 項目では、「正月 3 が日は誰とも過ごしていない、ひとりだった」6 名、「眠れない、不安や心配ごとなどがありますか」6 名であった。「認知症を疑うサイン」チェック項目では、「服装や髪の手入れにかまわなくなった、入浴を極端に嫌がる・身体の汚れが目立つ」3 名であった。

使用後アンケートの結果から、「チェックリストは使いやすいと思われましたか」は 65.2%が「思う」、「やや思う」と答えた。「チェックリストの内容は適切と思われましたか」は、「思う」、「まあ思う」と答えた人の割合は、43.4%であった。

「見守る上での判断基準として役に立ちましたか」

については、「とても役に立った」、「まあ役に立った」と答えた人の割合は 60.9%、「専門職への連絡すべき基準として役に立ちましたか」については、「とても役に立った」、「まあ役に立った」と答えた人の割合は、60.9%であった。

3. 組織育成研修プログラム

研修では、グループディスカッションを通して、まず、セルフ・ネグレクト状態にある高齢者が妻に先立たれて周囲から孤立していく寂しい気持ちを共有することができた。

その後の意見交換では、地域見守り組織として、「近隣・関係者間の連携」、「見守り拒否への対応」を必要とし、見守り組織メンバーの活動として、「何度も声かけや訪問をする」、「見守りのタイミングをみる」、に加えて、地域活動の広がりがみられた。

研修後アンケートの結果から、研修前は「セルフ・ネグレクトという言葉または状態があることを知っていましたか」について、「知っていた」のは、32.4%であった。研修後、「セルフ・ネグレクト状態とはどのような状態であるかわかりましたか」については、92.0%の人が「よくわかった」、「まあわかった」と答えた。また、セルフ・ネグレクト高齢者への見守りの必要性について、研修前は「よく感じる」と答えた人は 29.7%であったが、研修後は 48.6%へ増加していた。

D. 考察

1. 見守り組織活動の状況と変化

研修をとおして、地域見守り組織メンバーは、自分たちの見守りの限界を共通理解し、近隣や関係者との協力や地域全体で見守りを行う必要性を確認することができた。見守り組織メンバーは、そのことを踏まえて見守り活動を行っていることが明らかになった。しかし、現在は、見守り組織メンバーがそれぞれの役割の中で見守り活動を広げつつあるものの、地域見守り組織として見守り活動を広げることは今後の課題と考える。

セルフ・ネグレクト状態にある対象者の見守りは、挨拶や声かけといった普段の見守りに加えて、専門職や商店街関係者との協力など、地域ぐるみで見守りを行う必要性を感じていることが示された。

2. 見守りチェックリストの有効性

今年度の見守りチェックリスト使用後のアンケートから、見守りチェックリストの使いやすさについては、65.2%が使いやすいと答えていた。

見守り上の判断基準として役立ったと答えた人と専門職へ連絡すべき基準として役立ったと答え

た人はともに 60%を超えていた。このことから、見守りチェックリストは見守り組織メンバーの見守り基準として有効活用可能と考える。しかし、内容を適切だと思う人の割合は、43.4%であった。この理由としては、詳細な項目は、見守り専門職が把握している。地域見守り組織メンバーの役割は、普段の挨拶や声かけによる外からの緩やかな見守り活動であるため、詳細項目は把握していないことが考えられる。今回の使用後アンケート回収数は 23 部で、見守り組織メンバーの一部の意見に留まっている。今後、見守りチェックリストを有効活用するためには、住民見守りができないケースや新規転入者の見守り方法・見守り頻度の判断基準に活用する。

この地域では、住民用の見守りチェックリストは、外からの見守りや挨拶・声かけで把握できる内容を検討することが必要と考える。

3. 組織育成研修プログラムの効果

今年度の研修では、セルフ・ネグレクト状態の理解、セルフ・ネグレクト状態にある人の見守りの必要性の理解を深めることができたと考える。セルフ・ネグレクト状態で周囲から孤立し、見守りを拒否する事例を通じたディスカッションの内容からは、地域見守り組織として、近隣・関係機関と連携をとり、見守り拒否等支援が困難なケースへの対応を検討することで、見守り組織メンバーの見守り活動を支援する役割が期待されていることがわかった。

見守りを拒否する対象者は、地域見守り組織にとどまらず、地域全体で見守る必要があることを共通理解し、対象者が利用する商店等と協力して、見守りを行っていることが明らかになった。このように、地域見守り活動の広がりを見せていることが継続的な研修の成果と考える。

E. 結論

1. 見守り組織活動の状況

現在、地域見守り組織メンバーは、民生・児童委員1名と友愛訪問ボランティア33名で、見守り対象者ごとに主担当者を決めている。介入前の地域見守り組織メンバーは、見守り対象者48名を民生・児童委員と10名の友愛訪問ボランティアであったことを考えると、研究による介入は、地域見守り組織メンバーの充実および効率的な見守り体制づくりにつながる。

2. 見守りチェックリスト

見守りチェックリストの項目を整理した結果、見守り判断基準及び専門職へ連絡すべき基準として活用可能であることがわかった。

平成21年度・22年度をとおした有効性の検討をしたが、見守りチェックリストは、対象者や使用方法を検討することで、客観的な見守り判断基準として活用可能である。項目は、住民見守りの役割の範囲に応じ外からの見守りで、把握可能な項目に精選する必要がある。

3. 組織研修育成研修プログラムの効果

今年度は、見守りを行うことが難しいセルフ・ネグレクト事例は、地域見守り組織メンバーと見守り専門職が協力して見守ることが必要であること、今後このような対象者への見守りは、地域全体で行う体制づくりが必要であることが共通理解できた。

F. 健康危機情報：なし

G. 研究発表

1. 論文発表

・榊田聖子、金谷志子、津村智恵子；高齢者の地域見守りネットワークとソーシャル・キャピタル，高齢者虐待防止研究 Vol.6.1，pp130-139, 2010

2. 学会発表

・榊田聖子、津村智恵子、鍛冶葉子；高齢者のセルフ・ネグレクトを防ぐ地域見守り組織のソーシャル・キャピタルに関する研究，第6回日本高齢者虐待防止学会(名古屋)，2009.7

・榊田聖子、鍛冶葉子、津村智恵子、前原なおみ、山本美輪；地域高齢者見守り組織が活用できるチェックシート(その1)第7回日本高齢者虐待防止学会(広島)，2010.7

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし